

第50回 福岡県地方史研究協議大会

福岡と朝鮮通信使

—地方史の窓から世界が見える—

- 主催 福岡県教育委員会
共催 福岡県地方史研究連絡協議会（福史連）
期日 平成28年6月25日（土）
会場 福岡県立図書館レクチャールーム（本館地下1階）
日程

- 13:00 開 会
◆主催者あいさつ
◆福史連会長あいさつ
- 13:10 講 演（60分）
「朝鮮通信使を記録する
—黒田家文書と対馬宗家文書—」
講 師 山口 華代 氏
- 14:10 講 演（50分）
「地域史料から見た福岡藩儒と朝鮮通信使の交流」
講 師 吉田 洋一 氏
- 15:00 休 憩， 地方史フェア
- 15:20 講 演（30分）
「相島通信使関連史跡調査の近年の成果
—享保4年7月24日大風破船・61名溺死事故を中心に—
（相島歴史の会活動報告）」
講 師 今村 公亮 氏
- 15:50 質疑・応答
16:00 閉 会

講師プロフィール

山口 華代 氏

現 職 長崎県教育庁学芸文化課 主任学芸員

専 門 近世日朝関係史、対馬藩政史

研究テーマ 近世日朝関係史全般(朝鮮通信使研究)
対馬宗家文書の古文書学的研究、対馬藩の文書管理史

主な著作

- ・「近世日本の外交儀礼と東照宮信仰」(松原孝俊編『グローバル時代の朝鮮通信使研究』花書院, 2010)
- ・「対馬に現存する宗氏の図書二点」(佐伯弘次編『中世の対馬: ヒト・モノ・文化の描き出す日朝交流史』アジア遊学 177, 勉誠出版, 2014)
- ・「対馬宗家文書伝来の朝鮮文化財とその特徴」(『年報朝鮮学』16号, 九州大学朝鮮学研究会, 2013.12)
- ・「対馬藩における表書札方の設置と記録管理」(国文学研究資料館編『幕藩政アーカイブズの総合的研究』思文閣出版, 2015)

吉田 洋一 氏

現 職 久留米大学文学部准教授

専 門 日本近世儒学

研究テーマ 北部九州地方の儒学(亀井南冥・昭陽など)

主な著作

- ・「福岡藩の医学: 亀井南冥を中心に」(東アジア地域間交流研究会編『から船往来: 日本を育てたひと・ふね・まち・ところ』中国書店, 2009)
- ・(共編著)『西鉄沿線謎解き散歩』新人物文庫, KADOKAWA, 2014

今村 公亮 氏

現 職 相島・神宮寺 学芸員(ボランティア)、相島歴史の会事務局

専 門 近世・対外交流

研究テーマ 朝鮮通信使…主として福岡藩相島(領民目線)、雨森芳洲

主な著作

- ・「相島通信使関連史跡調査の近年の成果」(『朝鮮通信使地域史研究』創刊号, 縁地連朝鮮通信使関係地域史研究会, 2015.10)
- ・「相島通信使関連史跡の近年の成果」(『朝鮮通信使: 韓日交流の種々相』2012)
- ・「ロマンと歴史の謎・相島」(『福岡地方史研究』52, 福岡地方史研究会, 2014.9)
- ・「朝鮮通信使来聘と福岡藩藍島」(『福岡地方史研究』53, 福岡地方史研究会, 2015.9)
- ・「雨森芳洲と朝鮮通信使」(『対馬新考』梓書院, 2004)
- ・「福岡藩・相島と朝鮮通信使」(『西日本文化』476, 西日本文化協会, 2015.10)

朝鮮通信使を記録する—黒田家文書と対馬宗家文書—

長崎県教育庁学芸文化課 主任学芸員 山口 華代

17 世紀初頭に成立した徳川新政権は、周辺諸国とのあいだで今後どのような関係を築いていくのか対応を迫られていた。対朝鮮外交については文禄・慶長の役（1592～98）によって断絶していた国交を再開させることが課題であり、そこで幕府は対馬宗氏に朝鮮との交渉を命じた。対馬宗氏による交渉は困難を極めたものの、慶長 12 年（1607）に朝鮮国王の国書を携えた朝鮮使節が来日したことで、ようやく正式に日朝国交が回復した。その後も日本側からの求めに応じて朝鮮使節が来日し、17 世紀後半以降は徳川將軍の代替わりに招聘されることが定例化されていく。この使節を朝鮮通信使と総称する。近年の日韓両国における通信使研究の成果はめざましいものがある。

江戸時代における朝鮮通信使の来日は、近世日本が総力を挙げて対応した国家的規模の外交儀礼であった。幕府は通信使が江戸を往復する沿路に宿泊地や休息地を設け、そこを領有する大名たちには接待役を命じた。石高 10 万石以上の大名は、通信使に提供する宿所・食糧・牽き船・人馬などの経費全額を自弁し（「十万石以上は自分御賄」）、経済的負担は藩財政へ重くのしかかっていく。

福岡藩では玄海灘に浮かぶ相島での通信使接待が知られている。なぜ福岡城下から遠く離れた離島に接待地が設けられたのかについては議論があるが、先例主義と通信使一行の

安全を優先した沿路設定にその理由があったと考えられる。通信使の接待地は前回の実績をもとに幕府側が一方的に設定した。相島は慶長度通信使（1607年）からの接待地がそのまま引き継がれたものであった。

通信使一行は海路を移動したが、帆船であるがゆえ、天候の影響を受けざるを得なかった。そのため寄港地間の行程はかなり余裕をもって設定されていた。対馬藩主の参勤交代では、対馬～下関間是一日で往来しており、天候の悪化などの理由がない限り玄界灘に点在する島々に立ち寄ることはない。しかし通信使一行の場合は、朝鮮船だけでなく同道する対馬藩船も含め足並みをそろえて航行することは難しく、そこで天然の良港をもつ相島は絶好の寄港地として選び、船団すべてを入港させることで全体の統制を図ったと考えられる。しかし、どんなに準備体制を整えていても享保4年（1719）には相島で大風により61名の犠牲者を出す海難事故が起き、また天候回復を待つために数日間の滞在を余儀なくされている。

次に、日本側に残る記録の側面から朝鮮通信使をみていきたい。将軍代替わりの朝鮮通信使の来聘が定例化していく17世紀後半頃、幕府中枢においても“記録の重要性”が認識されるようになる。天和度通信使（1683年）を統括した老中・堀田正俊は、明暦の大火で消失した記録の復元を図ろうと各藩に過去の通信使記録を提出するよう命じている。幕府記録の焼失という突発的な事故に見舞われたことで通信使記録の整備が進んだことは皮肉であるが、何よりも前回の明暦度通信使（1655年）から約30年を経過し、幕府内部に通信使を迎えた経験のある人材が不在だったことが予想される。

朝鮮外交関係記録が不十分であった幕府を補完したのが対馬藩である。報告者は、対馬

藩が日朝の国交再開のための交渉も含め、通信使来聘についても朝鮮との事前交渉から接待の方針や細かな儀礼にまで幕府の方針に影響を与えていたと考えている。辺境に位置する外様大名である対馬宗家が、幕府の外交機能を肩代わりする程の影響力を行使することが可能であったのは、ひとえに過去の記録の充実した蓄積にあったからといえる。対馬藩には藩政初期から朝鮮関係の文書・記録を蓄積することが求められ、膨大な記録群が形成されていった（対馬宗家文書）。通信使についても例外ではなく、幕府や諸藩からの問い合わせにも対応できるように記録を整備していた。通信使終了後、対馬藩では通信使御用で発生した藩内文書を集約し、記録に残すべき内容については抜粋するといった編纂作業をへて、朝鮮通信使記録としてまとめていた。通信使来聘に関する藩士個人の経験や記憶を、いち早く文字情報に変換し記録化することで、藩組織として活用することが可能な情報としていったのである。日常的に朝鮮国と外交・貿易関係にあった対馬藩は、誰よりも記録が重要であることを知っていたといえよう。

一方、福岡藩でも將軍代替わりの通信使来聘にそなえて、藩の公式記録として記録を整備していた。福岡県立図書館蔵の黒田家文書には、天和度（1683年）、正徳度（1711年）、享保度（1719年）、延享度（1748年）、宝暦度（1764年）の各回の朝鮮通信使記録が残っている。いずれの回も通信使の相島往来によって記録が書き分けられ（「来聘記」「帰国記」）、さらに流麗な文字によって清書されていることから永年保存用の記録であったと考えられる。（ちなみに朝鮮通信使ユネスコ記憶遺産の構成資産には、このうち特徴的な記事が掲載されているという理由から、宝暦度の朝鮮人来聘期 11冊と朝鮮人帰国記 4冊が選定されている。）

黒田家文書に残る朝鮮通信使記録の特徴をみると、当時の福岡藩がどのように通信使接待に対応していたかがよく分かる。朝鮮通信使来聘に係る幕府命令は、通信使来聘の時期や沿路御馳走大名の指名のほか、“前回の格式に準じあまり華美にならぬように”といった抽象的な内容なものが多く、細かな点で現場判断が必要とされるものであった。そのため各藩では過去の詳細な記録をもとに準備を進めていったのであり、それが黒田家文書にも朝鮮通信使記録として蓄積されていったと考えられる。

朝鮮人を迎えるにあたって、記録上ではどうしても分からない点や判断に迷う点が生じる。そのたびに幕府に判断を仰ぐことはできないので、その代わりに対馬藩に問い合わせを行った。また、通信使接待を受け持つ諸藩同士でも情報交換を行っていた。たとえば黒田家文書の通信使記録には、長門萩藩・岩国藩・安芸広島藩など同じ接待を受け持つ藩のあいだで頻繁に使者が往来し、相互に情報の共有を行っていたことが指摘できる。相島接待のようすを伝える著名な「藍嶋図」も、上関での接待の参考にするため相島を訪れた岩国藩士によって描かれたものであり、藩相互での“横のつながり”があったことを示す貴重な歴史資料である。

冒頭でも述べたように、最近の朝鮮通信使研究の深化は目を見張るものがあり、通信使記録は日本のみならず韓国においても新資料の発見が報告されている。今回の報告では、対馬宗家文書や黒田家文書といった通信使接待にあたった日本側記録に焦点をあてた。日本国内には数多くの朝鮮通信使記録が残されているが、記録者の立場によってその内容は大きく異なっていくものである。その立場の違いを理解しながら、それぞれの記録の内容を読み解いていくことが朝鮮通信使研究には求められる。

第50回 福岡地方史研究協議大会

テーマ「福岡と朝鮮通信使—地方史の窓から世界が見える」

朝鮮通信使を記録する

—黒田家文書と対馬宗家文書—

日時 平成28年6月25日(土)

場所 福岡県立図書館

長崎県教育庁学芸文化課
主任学芸員 山口華代

はじめに

○「朝鮮通信使」を**世界記憶遺産**へ

・2016年3月31日 日韓共同で申請書を提出

・日本側 48件209点

韓国側 63件124点

世界記憶遺産

国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）
が主催
危機に瀕した古文書や書物などの歴史的
記録をデジタル技術を駆使して保全し、
広く公開することを目的とした事業

朝鮮通信使とは



「朝鮮国信使絵巻」
(対馬宗家文書・県立対馬歴史民俗資料館保管)

- 江戸時代
朝鮮王朝から日本に
やってきた外交使節
- 平和で安定的な
日朝関係を象徴

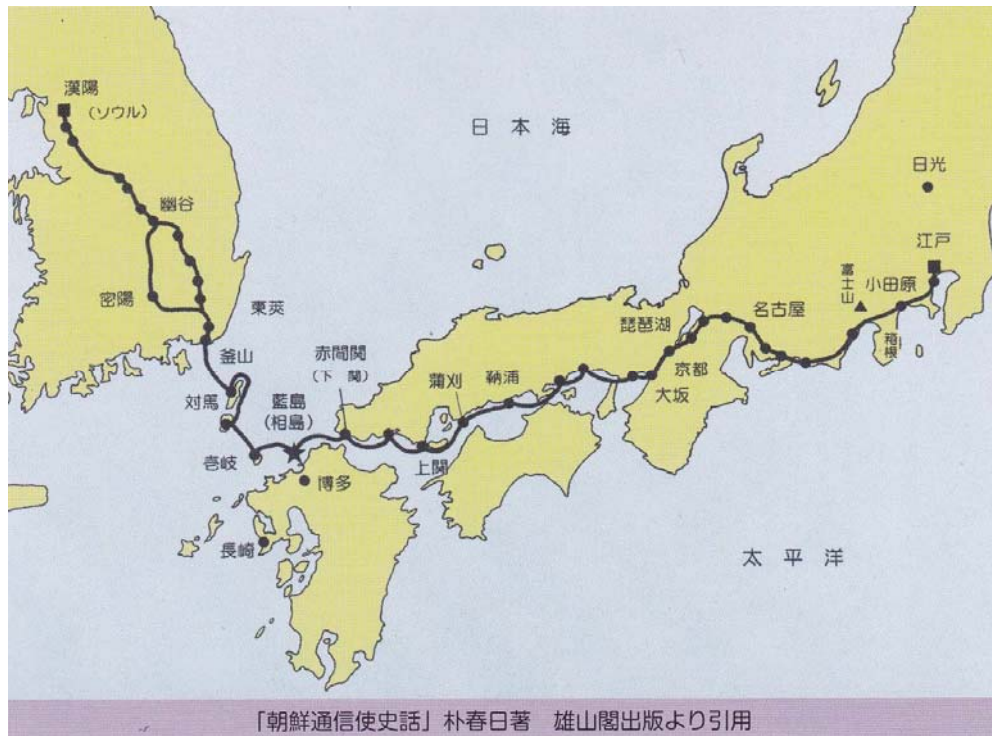
朝鮮国王の国書を運ぶ



「朝鮮国信使絵巻」
(対馬宗家文書・県立対馬歴史民俗資料館保管)

- 文禄・慶長の役
⇒日朝国交の断絶
- 徳川幕府は朝鮮との国交再開
を望む
→対馬宗氏が朝鮮交渉にあたる
- 慶長12年（1607）
朝鮮王朝の国書をたずさえた外
交使節の来日

朝鮮通信使の旅程



次数	西暦	年号	総人員 (大坂留)	使命	相島往來	
					往	復
1	1607	慶長 12	467	修好回答兼刷還	3 / 22 着 (1日) 3 / 23 発 (1日)	6 / 19 着 (1日) 6 / 20 発 (1日)
2	1617	元和 3	428 (78)	大坂平定祝賀 回答兼刷還	8 / 3 着 (1日) 8 / 4 発 (1日)	9 / 27 着 (1日) 9 / 28 発 (1日)
3	1624	寛永 元	300	家光襲職祝賀 回答兼刷還	10 / 24 着 (9日) 11 / 2 発 (1日)	2 / 7 着 (1日) 2 / 8 発 (1日)
4	1636	寛永 13	475	泰平祝賀	10 / 27 着 (2日) 10 / 29 発 (2日)	2 / 11 着 (2日) 2 / 13 発 (2日)
5	1643	寛永 20	462	家綱誕生祝賀 日光山致祭	5 / 18 着 (1日) 5 / 19 発 (1日)	9 / 19 着 (4日) 9 / 23 発 (4日)
6	1655	明暦 元	488 (103)	家綱襲職祝賀 日光山致祭	7 / 26 着 (9日) 8 / 4 発 (9日)	1 / 8 着 (2日) 1 / 10 発 (2日)
7	1682	天和 2	475 (112)	綱吉襲職祝賀	7 / 9 着 (1日) 7 / 10 発 (1日)	10 / 14 着 (2日) 10 / 16 発 (2日)
8	1711	正徳 元	500 (129)	家宣襲職祝賀	8 / 17 着 (9日) 8 / 26 発 (9日) 8 / 29 地島発 (3日)	2 / 1 着 (1日) 2 / 2 発 (1日)
9	1719	享保 4	475 (108)	吉宗襲職祝賀	8 / 1 着 (9日) 8 / 10 発 (9日) 8 / 18 地島発 (8日)	12 / 12 着 (1日) 12 / 13 発 (1日)
10	1748	延享 5	475 (83)	家重襲職祝賀	4 / 2 着 (2日) 4 / 4 発 (2日)	7 / 16 着 (1日) 7 / 17 発 (1日)
11	1764	明和 元	472 (106)	家治襲職祝賀	12 / 3 着 (23日) 12 / 26 発 (23日)	5 / 26 着 (2日) 5 / 28 発 (2日)
12	1811	文化 8	336	家斉襲職祝賀	対馬聘礼	

○江戸時代を通じて全12回の来日

○17世紀半ば以降
徳川将軍の代替わり
ごとに来日

朝鮮通信使の構成



朝鮮国王の国書と別幅（べっぷく）を運ぶ



輿に乗る正使

- 正使、副使、従事官 ……「三使」
- 上々官、上官
倭学訳官（日本語通訳官）から任命
- 製述官
文筆の才ある者から選ばれる
- そのほか、医者・画家、曲馬に優れた者



「朝鮮国信使絵巻」
（対馬宗家文書・県立対馬歴史民俗資料館保管）

通信使の案内役として随行する対馬藩士



小童

2 相島での朝鮮通信使接待



相島にある「朝鮮通信使客館跡之碑」



相島の航空写真(H14.6.12)

相島

○周囲 6.14キロメートル

○総面積 1.32平方キロメートル

○新宮漁港から北西7.5キロメートル

玄海灘における相島

○筑前国裏糟屋郡藍嶋(相島)浦

○福岡藩 遠見番所の設置

○相島の遠見番所
西端の高山(77m)

定番 2人

足軽 3人(中村・吉村・友納)



江戸時代の相島

「漁家六十余戸、嶋の南西に連れり」

- 「田数 3町9段26歩
- 畑数 21町1歩半
- 石高 184石3斗余り」

(「筑前国続風土記拾遺」)



「藍嶋図」
(岩国徴古館所蔵)

相島に残る朝鮮通信使関連史跡



先波止

○天和度通信使
(1682年)
築造

○長さ
約47メートル

○幅 5メートル

相島に残る朝鮮通信使関連史跡



○若宮神社井戸

新宮町指定文化財
朝鮮通信使関連遺跡群

神宮寺

○神仏習合の時代
若宮神社に隣接していた

○昭和38年(1968)
島の西海岸に新築移転



「朝鮮通信使客館跡之碑」

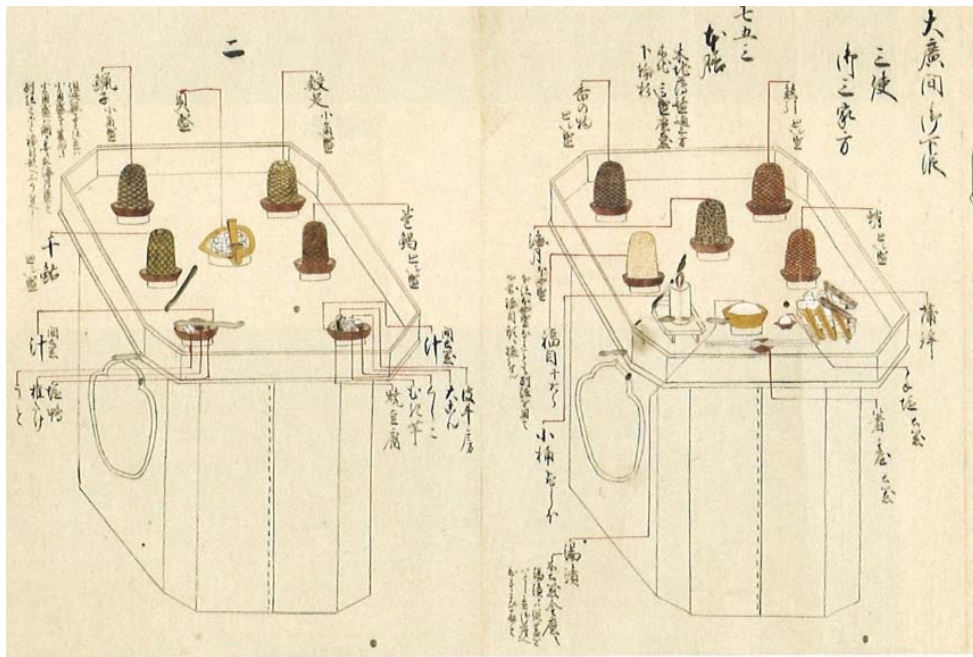
○客館
朝鮮使節が宿泊する施設
「官人木屋」(黒田家文書)

○相島来島ごとに新造



【参考】「朝鮮通信使客館跡 新宮町埋蔵文化財発掘調査報告書第17集」(2000年)

通信使の食事



○七五三饗応膳
・武家における
最高級のもてなし料理

「七五三盛付膳之図」
(対馬歴史民俗資料館保管)



○通信使一行へ食糧の
提供

米、塩、味噌
豚、イノシシ、活魚、
密柑、酒

引替膳

相島へ渡る



相島側の渡船場 町営渡船「しんぐう」から下船する多くの観光客 (H28年5月撮影)

猫の島で有名に



3 朝鮮通信使を記録する

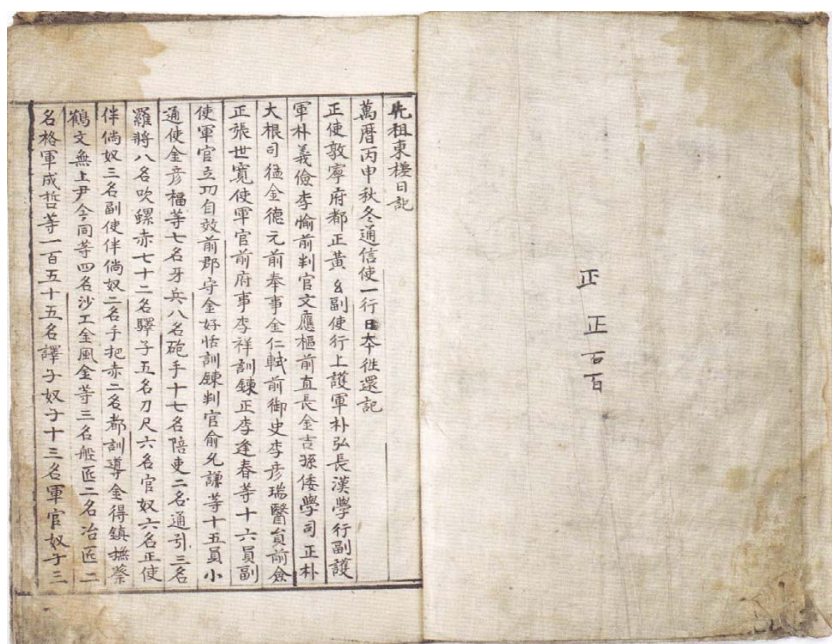


黒田家文書のうち朝鮮通信使記録
(福岡県立図書館蔵)

さまざまな記録 ～朝鮮側の記録



黄慎「東槎日記」
1596年の来日記録



朝鮮の人がみた相島

○享保度通信使(1719年) 申維翰(シン・ユハン)の日記・「海游録」

上には青山があって三面をとりまくこと半月の如く、そのまん中は広くゆったりと水をたたえ、民田と屋舎は俯して海に臨む。(中略)

草木や雲烟はすべて爽朗にして幽楚。

観る者はたちまちにして恍然として我を忘れる。すなわち、余が航海して以来、初めて見る神仙境である。

姜在彦訳『海游録』(平凡社、東洋文庫)

さまざまな記録

～対馬藩宗家文書

○対馬藩宗家

対朝鮮外交のエキスパート



外交経験にとぼしい

幕府を補う

○膨大な過去の記録を蓄積

対馬宗家文書

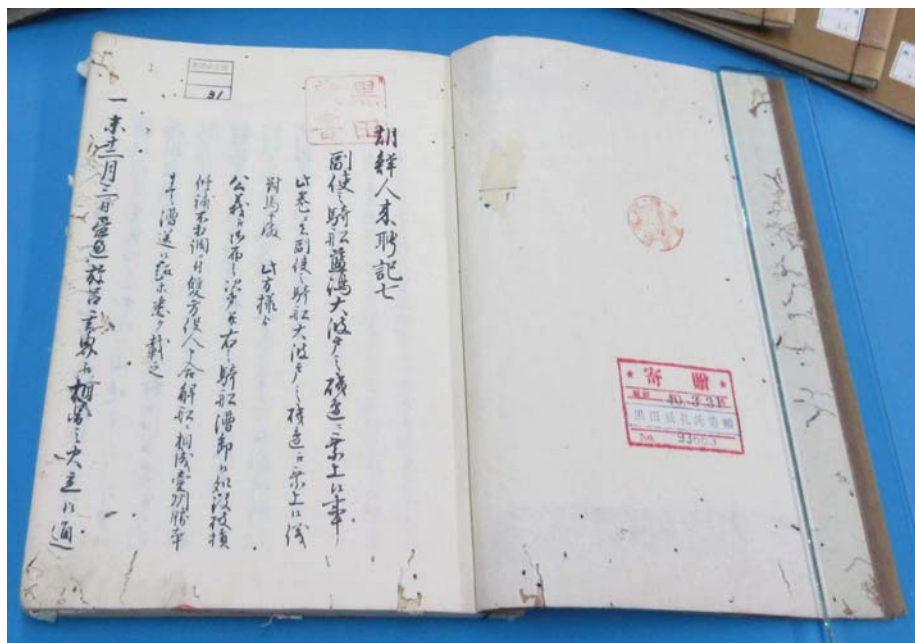


宗家史料が収められている長崎県立対馬歴史民俗資料館の収蔵庫

宗家文書の朝鮮通信使記録



- 通信使来日に係る事前交渉
朝鮮⇔対馬藩⇔幕府
- 通信使の江戸往来日記
- 沿路大名とのやりとり
- 贈答品のリスト



○福岡藩の朝鮮通信使記録

- 天和度（1682年）
- 正徳度（1711年）
- 享保度（1719年）
- 延享度（1748年）
- 宝暦度（1764年）

江戸時代12回の来日のうち
5回分の記録が残る

福岡藩の朝鮮通信使記録 その特徴

○大名間における情報共有

- 長門萩藩・岩国藩・安芸広島藩など



“もてなし”の「基準」が自然と形成されていく



「藍嶋図」も岩国藩士が参考のために記録したもののひとつ

おわりに



いずはら港まつり
朝鮮通信使行列（対馬市厳原町）

相島を訪れてみては・・・



地域史料から見た福岡藩儒と朝鮮通信使の交流

久留米大学文学部准教授 吉田 洋一

はじめに

朝鮮通信使が訪日して果たした重要な役割には、政治外交の側面と文化交流の側面とが考えられる。沿路諸藩の客館では、朱子学をはじめ先進的な朝鮮文化が学ばれたが、本報告では福岡藩に関係する知識人と通信使との交流、特に明和元年（1764）に亀井南冥が応接した事例を中心に解説する。

1 通信使と儒者との交流

通信使と儒学者は、筆談によって交流を図っていたが、その内容は多岐にわたる。李元植『朝鮮通信使の研究』によると、科挙制度、朝鮮諺文、冠婚葬祭、医事問答、花鳥、筆墨紙の製法、生活習俗、朱子学（李退溪）、中国（明・清）事情や徐福の渡東に関することまで話題にのぼったという¹。

朝鮮王朝で高麗光宗九年（958）から 1894 年まで続いた科挙制度の有無については、日朝双方で関心が高かったようで、享保期の朝鮮通信使製述官申維翰は、『海游録』のなかで「日本には科挙の試験によって人材を登用する法がなく、官は大小にかかわらずみな世襲であり、優秀な者が世に出ることが稀である」と嘆いている。一方日本では、長崎出身の儒学者岡島冠山（1674～1728）が、「中国、朝鮮共に科挙制度があり文才の実力を発揮できる。我が国でもこの制度があれば良才が埋没することはない」と述べている。また、正徳期の製述官李磻（東郭）が雨森芳洲（1668～1755）に対して「わが朝鮮に生まれていたら、これほど冷遇されるはずがない」と嘆いたという²。江戸時代の朝鮮と日本が、中国の学術文化を模範としそれを受容しようとしていたことがうかがえる。

日朝の文字に関する問答では、双方が朝鮮のハングル、日本のひらがな・カタカナに関する見解を述べ、特にカタカナとハングルとの類似性に共感している³。

2 亀井南冥の事績と明和元年の応接

亀井南冥（諱は魯、字は道載、通称は主水、南冥はその号）は江戸時代後期の福岡藩を代表する儒医学者である。寛保三年（1743）父・聴因（古医方派の医者）、母・徳の長子として、筑前国早良郡姪浜（現福岡市西区姪浜）にて出生。その後、肥前蓮池の儒僧・大潮

¹ 同書 82 頁。

² 同上。

³ 同 87 頁。

(1676～1768)、大坂の儒医学者・永富独嘯庵(1732～66)らに師事し、帰国後父と共に自宅(現福岡市中央区唐人町)敷地内にて開業、同時に儒学講義所(蜚英館、のち南冥堂)を開く。この「教育者」としての活動、加えて、朝鮮通信使応接(明和元年・1764)の際の漢詩文の才能などにより、安永七年(1778)、「儒医兼帯」として福岡藩(七代目・黒田治之)に召し抱えられ、同藩藩校(東学・修猷館及び西学・甘棠館)設立に尽力。しかし、寛政四年(1792)甘棠館祭酒の地位を追われ、文化十一年(1814)に生涯を閉じた⁴。著作には『南游紀行』(安永三・1774年)、「金印弁」(天明四・1748年)、『論語語由』(寛政五・1793年)など、門人には江上荅洲(1758～1820)、原古処(1767～1827)、青木興勝(1762～1812)など、長男昭陽(1773～1836)の門人には、廣瀬淡窓(1782～1856)・旭荘(1807～63)などがある。

南冥の生涯のなかで画期となるのが、福岡藩に出仕した時であることは言を俟たない。一介の町医者から抜擢された要因の一つとして、明和元年の通信使応接により漢学の実力を認められたことが挙げられる。しかしながら、応接に臨むにあたりどのような経緯で「儒医兼帯」として出仕したのかなど不明瞭な部分が多い。当時福岡藩儒であった井土廬庵(廬垌、1707～70)の仮の門弟となり応接に加わったともいわれているが⁵、今後の検証が必要であろう。

南冥が通信使と数度にわたって応酬した記録として『泱々余響』がある。「泱々」とは『春秋左氏伝』襄公二十九年の「美哉、泱泱乎。大風也哉。表東海者、其大公乎。(美なるかな、泱泱乎たり。大風なるかな。東海に表たる者は、其れ大公か。)」を典拠とし、呉の季札(政治家)が東の斉国の歌を賞賛した言葉であり、東国へ来訪した韓使を称えるという認識があったと思われる。全70丁(上下二巻)の冊子の内容は、南冥と通信使たちとの唱和や筆談をおおむね日記風に詳述したものである。漢詩の唱和は五言及び七言の絶句・律詩、詩経・楚辞体などを自在に駆使したもので、当時弱冠二十一歳であった南冥の恵まれた才能が十分に発揮されている。筆談から、医術・儒学・漢詩文や学者の批評など、当時の学界に関する状況が把握できる。特に南冥の医学の師であった永富独嘯庵の名を繰り返しあげており、南冥は「漢蘭折衷派」と称された独嘯庵の医学に対しての通信使の反応に注目していたことがうかがえる。

【参考文献】

李元植『朝鮮通信使の研究』1997年初版、思文閣出版

松原孝俊編『グローバル時代の朝鮮通信使研究』2010年、花書院、所収

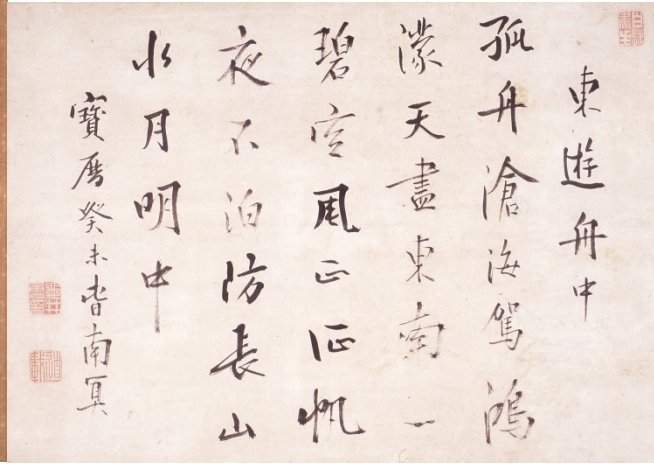
姜在彦訳注『海游録—朝鮮通信使の日本紀行』東洋文庫252、1974年初版、平凡社

⁴ 拙稿「亀井南冥の医学思想」(『洋学8』洋学史学会研究年報、2000年、所収)など参照。

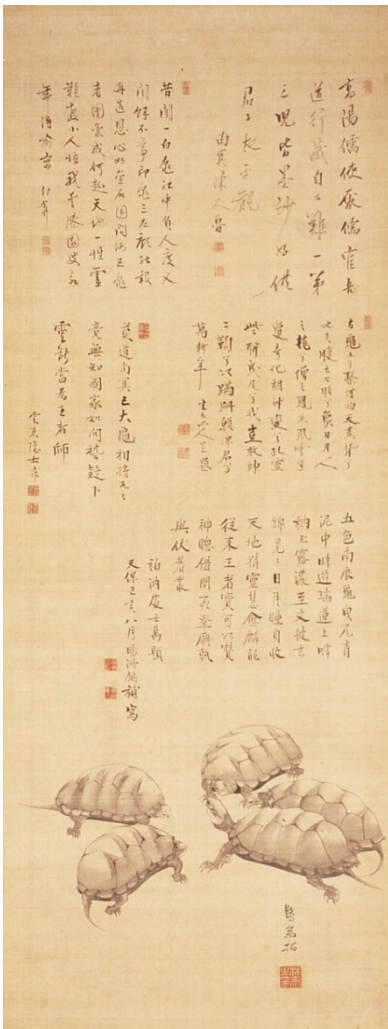
⁵ 岡村繁『『泱々余響』解説』(『亀井南冥昭陽全集 第一巻』葦書房、1978年、所収)、以下同書の解説はこれによる。



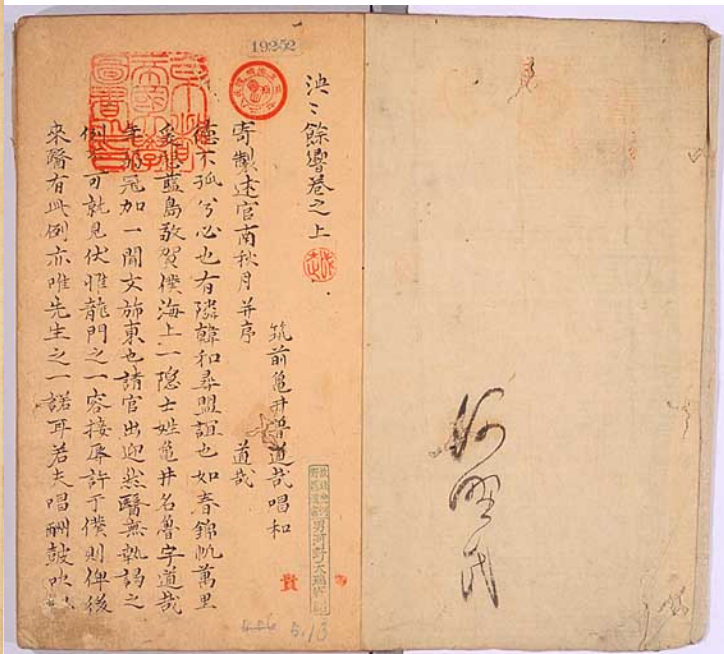
亀井南冥肖像（能古博物館蔵、南冥-1）



南冥詩箋（能古博物館蔵、な-20）



五龜画賛（能古博物館蔵、な-29）



『洪々余響』1丁目（京都大学電子図書館）

地域史料から見た福岡藩儒と 朝鮮通信使の交流

はじめに

1. 通信使と儒者との交流
2. 亀井南冥の事績と明和元年の応接

おわりに

吉田洋一(久留米大学)

はじめに

- ① 日本の朱子学…鎌倉時代五山の禅僧が紹介、室町末期～戦国時代(藤原惺窩、林羅山)～江戸時代に官学へ(林家)
- ② 福岡藩の儒学…前半・貝原益軒(1630～1714)―竹田春庵(竹田家)、後半・亀井南冥(1743～1814)、藩校(天明4・1784年落成)東学修猷館(竹田定良)・西学甘棠館(亀井南冥)

1. 通信使と儒者との交流(福岡)

- ① 天和度…貝原益軒、天和2(1682)藩命により甥・好古、門人鶴原時敏(九臯、1666~1710)を伴い接待、朝鮮儒学(李退溪ら)や医学の質問、漢詩の応酬など
 - ② 正徳度…竹田春庵(1661~1745)らが応接、薬剂や算学書に関する質問、漢詩の応酬など(『藍島倭韓筆語唱和』)
- 竹田春庵…京都の人、貝原益軒に就いて修学し、益軒の推薦で三代藩主光之に仕えた後、綱政・宣政・継高にも歴任、著書に『四書小学解』、『筑前孝子良民伝』など。

朝鮮儒教(儒学)について

- 朱子学以前の儒教(三国時代~高麗期後期)は、支配思想であった仏教と共存、哲学は仏教にゆだね、もっぱら詩文の才を政治・外交で発揮する「文詞・文学儒教」であった。
- 朝鮮に儒教の特徴は文臣優位の両班(ヤンバン)の儒教である。彼らは初等教育の書堂、ソウルでは四学、地方では郷校を経て、最高学府の成均館に進み科挙試験を受験、その後文臣の地位を独占。
- 朝鮮の儒教は「朱子学一尊」、中央政府が安定期を迎えると、官を辞して地方に下る「士林」という在野勢力が形成される。吉再(1353~1419、嶺南学統)の学統から李退溪(1501~70)らが生まれた。
- 官吏のポストをめぐり、学統の対立(党争)が必至。例えば、東人(主に李退溪派)と西人(主に李栗谷(1536~84)派)の対立など。

- 申維翰(シニユハン/しんいかん、1681～?)…朝鮮、李朝中期の文人。号は青泉。33歳で科擧に及第して官途に就き、奉常寺僉正を務めた。文章に優れ詩才にも恵まれていたので徳川吉宗の將軍即位の折には通信使南泰耆(ナムテギ)に詩文をつくる製述官として随行した。その際の見聞や朱子学者雨森芳洲との応酬などを旅日記風に綴った『海遊録』해유록を著したが、これには外国人の目に映った徳川中期の文物が描かれているだけでなく、当時の朝鮮知識人の日本観の一端がうかがわれる。遺稿に『青泉集』청천집がある。(鄭在鎬)

世界文学大事典

- 岡島冠山(1674～1728)…江戸時代中期の儒学者。名は璞、字は玉成、初名は明敬、初字は援之、通称は弥太夫、冠山と号した。延宝二年に生まれる。長崎の人。はじめ訳士として萩藩に仕えたが、のち退いて程朱の学を修め、江戸・大坂・京の三都に遊んだ。華語(すなわち中国の口語)に精しいことによって従遊する者が多く、荻生徂徠とも、華語を通じて親交があった。はじめ江戸に在って林鳳岡に学び、根本としては程朱の学を奉じたが、また人情の自然をも重んじ、中国の通俗小説を紹介し、『水滸伝』の国訳を行なって刊行し、また『唐話纂要』六巻などを著わして、華語の研究に力を注いだ。江戸時代に華語重視の風をひらいたはじめの人として注目される。正徳元年(1711)に韓使が来聘したときはよくこれと応接した。享保十三年正月二日没。五十五歳。京都清光寺に葬られる。著は上掲のほか『華音唐詩選』七巻、『唐音三体詩』三巻、『唐訳便覧』五巻などがある。〔参考文献〕東条琴台『先哲叢談後篇』三(頼 惟勤)

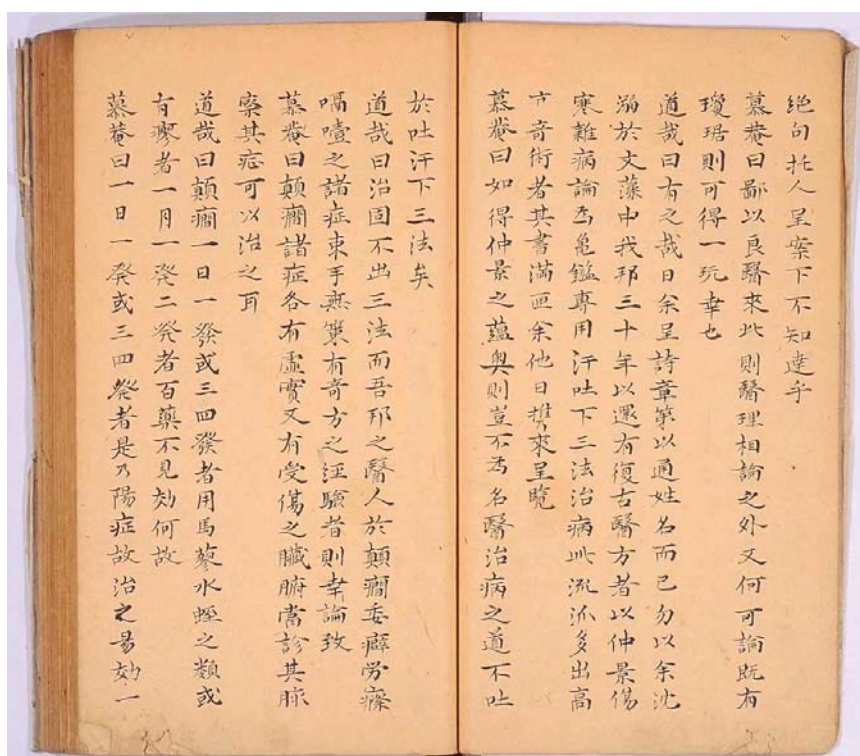
国史大辞典

2. 亀井南冥の事績と明和元年の応接

『決々余響』について

- 明和の通信使…正使・趙曦、副使・李仁培、従事官・金相翊ほか総勢480余名。
- 南冥と詩文の応酬にあたった人物は、南玉(随従学士。字時韞、号秋月、製述官大学士)、成大中(正使書記。字士執、号龍淵)、元重拳(副使書記。字士才、号玄川)、金仁謙(従事官書記。字士安、号退石)、大医官・李佐国(字聖甫、号慕菴)ら
- 通信使が藍島に寄泊した期間は、12月3日～26日、筑前の儒者と通信使(主に南玉)との唱和は計5回。
- 南冥が藩儒に従って藍島に渡ったのは最初の2回、その後は単独で面会。

『決々余響』(京都大学電子図書館)



『決々余響』雑感

・李慕菴「日本ではどのような医学が行われているのか」

南冥「『復古医方』というものがある。(張)仲景の『傷寒雜病論』を龜鑑とする。治療には専ら(発)汗・吐(瀉)・下(痢)の三方を用いる。この医術の流派や書籍は多数ある。」

・李虞裳「天下の奇書や佳士、名山水などが知りたい」

南冥「大坂に(永富)独嘯庵、島原に長沢楽浪という豪傑がいる。特に独嘯庵の『囊語』、楽浪の『王道内編』は卓越した著作である。また(学問・詩文では)、徂徠、仁斎、南郭、信陽などが優れており、医学書では、(山脇)東洋の『医則』や『蔵志』、(香川)修庵の『薬選』、独嘯庵の『吐方考』、『漫遊雜記』など、みなすばらしい。名所は貴船が通航する折に見ることができるが、琵琶湖や厳島、松島などが有名である。ただ私は、松島はまだ見たことがない。」

同書・巻上(『亀井南冥昭陽全集第一巻』506～508頁)

近世思想概観

林羅山(ウイキペディア)



・徳川家康が官学として朱子学を重用

儒学: 藤原惺窩(1561—1619)・林羅山(1583—1657)→林家(世襲)

医学: 李(東垣)・朱(丹溪)医学(「後世派」)→多紀家(江戸中期頃)

・儒学の復古運動(医学も!)17世紀中期ころ～

儒学: 伊藤仁斎(1627—1705)・荻生徂徠(1666—1728)・山鹿素行(1622—85)「古学派」

医学: 名古屋玄医(1628—96)・後藤艮山(1659—1733)・香川修庵(1683—1755)「古医方派」
→山脇東洋→杉田玄白…蘭学へ

・国学の隆盛

賀茂真淵(1697—1769)→本居宣長(1730—1801)…平田篤胤(1776—1843)

→尊王攘夷運動(陽明学の影響も!)



本居宣長(ウイキペディア)

東遊舟中

孤舟滄海駕鴻

濛、天盡東南一

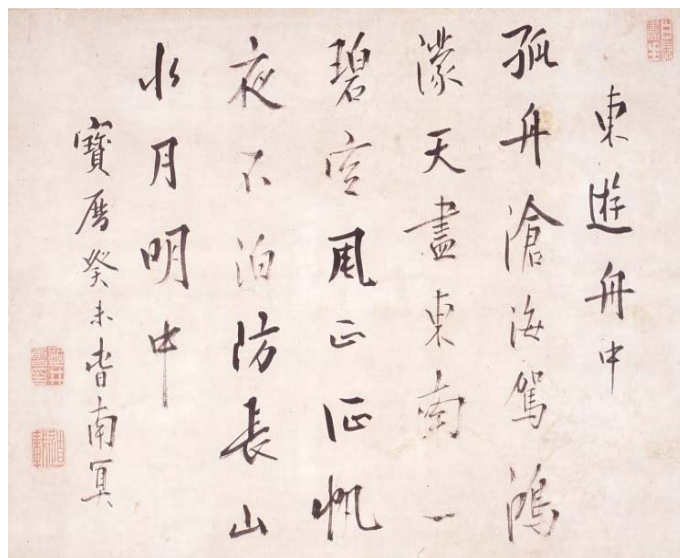
碧空、風正征帆

夜不泊、防長山

水月明中

宝曆癸未春 南冥

印印



能古博物館所蔵

(読み下し)案

東遊の舟中

孤舟滄海鴻濛に駕し

天は尽くす東南一碧の空

風は正しく征帆夜も不泊

防長の山水月明の中

宝曆癸未の春 南冥

おわりに

その他参考文献

- 大庭卓也「福岡藩竹田春庵と朝鮮通信使」(『語文研究』九十三号、2002年、所収)
- 大庭卓也「西日本に残される朝鮮通信使自筆資料」(『国文学研究資料館紀要』第三二号 文学研究篇、2006年、所収)
- 『福岡県史 通史編福岡藩文化(下)』(第5章 文学「韓使応酬」高橋昌彦)西日本文化協会、1994年
- 河宇鳳『朝鮮実学者の見た近世日本』ペリかん社、2001年
- 『玄界灘の江戸時代 軍船・廻船・異国船(平成9年度福岡市博物館特別企画展)』福岡市博物館、1997年

など

相島通信使関連史跡調査の近年の成果

—享保 4 年 7 月 24 日大風破船 61 名溺死事故を中心に—

(相島歴史の会活動報告)

相島歴史の会 今村 公亮

1. はじめに

2010 年 11 月、朝鮮通信使縁地連絡協議会第 17 回大会が新宮町にて開催されるので、モニュメントを造ろうと相島歴史の会メンバーで思い立った。諸事情で頓挫したが、通信使の遺物はないものかと、百合越浜の石碑に着目した。『新宮町誌』に「風化して字が読めず、祀られ始めた年代も不明」とあり、島人の言い伝えでは、流れ人の墓ではといわれ、通信使との関係はないとされていた。ところが拓本採った結果「韓使来聘」の 4 文字が明確に読み取れ、朝鮮通信使との関連が古文書で裏付けられた。

その後、石碑の傍にあった台座を発掘し拓本を採ったら「享保四己亥年七月二十四日風波茲死人略」の文字が判明した。2011 年 1 月、相島での報告会の席上、神宮寺住職から「寺に 61 名の合同位牌があるが」を聞き、その後の調査で扁額や、施餓鬼料を黒田公より賜ったと記述した寺の資料があると判明した。相島には朝鮮通信使関連遺物は、2 つの波止、客館跡、井戸、積み石塚付近の 4 つの墓碑しか無かったが、その後の調査からこの石碑建立年を次の通信使が来た延享 5 年（1748）ではと比定した。新たな史料の出現で藩・領民が、通信使にどのように接していたのか、徐々に明らかになってきた。

近年の調査を検証しながら、相島歴史の会の活動報告をしたい。

2. 調査結果

(1) 百合越浜の石碑（供養塔）・台座の碑文

① 碑文

表 「合葬舟人墓」

裏 「【石割れで文字不明】（拾と思われる）一人浦出者八人市出廿四人縣出十八人

□ 茲韓使来聘時行前倒舟人子来浦長及

□□ 之長追念往事之慘毒建石勒之云

□□ 五年三月 玉山 書

施主浦

触口庄屋才□（料カ）中」

② 台座

台座・・・「享保四己亥年

七月二十四日

風波茲死人□

□□為□□」

台座の上に乗っていた物、地蔵か、石柱か、今後の検証が必要。

(2) 古文書の記録

合計61人は記録と合致するが、侍関連溺死者の人数が11人、12人と齟齬あり。

①横大路家『大庄屋留書』

「御梶取其他御扶持人拾壱人・御郡水夫壱八人・御町水夫式拾四人
・御浦水夫八人ノ六拾壱人死ス」

つまり 11人+18人+24人+8人=61人

②『福岡藩朝鮮通信使記録(九)』「享保四己亥 朝鮮人来聘記五」

「溺死之分

御船頭 藤田 権平 御矢倉 大塚 佐左衛門 中村 八三郎

揖取・御手加子 五人

毛利又兵衛家来 若黨 式人 小者 式人 水夫四拾九人」

他の事故記録を紹介する。

『黒田(続)家譜卷之十九』に61名の溺死記録あり。他『長野日記』、『吉田家伝録』、『安見鼎臣弼集録 黒田家譜早鑑』、『近世博多家伝録』にも同様な記録あり。

7つの記録に事故の記述はあるが、石碑建立、合同位牌、扁額、施餓鬼供養料などの記述は見当たらない。領民の立場から書かれたのは①の横大路家「大庄屋留書」のみである。石碑の碑文をみると溺死者の数は合致しているが、御町が市、御郡が縣の表現になっている。

特筆すべきは朝鮮側の記録、享保度の通信使一行の軍官の金滄が著した『扶桑録』に「70余人の溺死を8月3日に知り、驚き心から悼み同情した」とあるのを最近見つけた。

(3) 経塔様

先波止の近傍にある。建立の時期は不明なれど碑文に「・・海中 横死人 為追善」。

往古より経塔様の広場で8月16日に流れ灌頂として施餓鬼供養されている。

(4) 神宮寺の保存史資料(遺物)調査

① 合同位牌・・・61名の戒名確認 サイズ 幅 310mm 高さ 1230 mm

② 寺の資料・・・当時4名(清助、長九郎、千太郎、清八)に銀3百目を施餓鬼料から貸付けたとある。

「當山貸付ノ施餓鬼料六錢三百目ハ往古國主黒田公ヨリ六十一靈
追善ノ為メニ寄附セラレシ祠堂財ニ口碑ニ傳へしも・・・略」

③ 扁額・・・扁額文字は、「心行三昧」、書家は墨池主人、落款は「横田氏」「鳴郷」「楽琴書」、黒田藩家来、横田久平、横田家は第6代継高公に延享元年(1744)から仕官。大文字役(書家)、横田久平は分限帳(延享・文化・天保・安政)に4人記載あり。

3. 考察

①石碑について

建立は浦の大庄屋・庄屋・賛同者である。年号は五年であり、いつの五年かは干支の記載がないため断定できない。碑文にある「玉山」とは、福岡藩2百石、書家、儒者、医者である。本名、八田毅邦は(1713~1785年)、享年72歳。玉山と竹田定之進(定澄・春庵の息子)と書簡から交友関係がわかる。碑の建立を通信使来聘の延享5年(1748)と推定すると玉山の年齢は35歳となる。なお玉山の墓碑は亀井南冥に依る。

石碑の建立は事故1年前後に建立したとも考えられるが、そうであれば当時の触口である

横大路家の「大庄屋留書」に事故発生や、通信使関係記録を26件にわたり些細なことまで記していることから記載がなければならない。

念のため、横大路家の古文書約15百点から目ぼしき古文書『備忘愚抄』『備忘書』『備忘抄』を調査したが見当たらない。

横大路家の後任の大庄屋金内家の古文書、福間の大庄屋の今林家（七代目傳兵衛、八代目五郎衛門）も調査したが、現時点では見出し得ない。

② 台座の建立時期

事故発生から享保5年7月24日前後、1周忌の可能性が高い。

③ 経塔様

百合越浜の石碑までは当時は道も無く極めて困難、波止場の近傍に建立し他の横死人と併せ供養したと考えられる。

④ 合同位牌

常識的には1年忌以内であろうが、合同位牌であること、黒田藩主より扁額と同時に贈呈されたとすると、次の通信使来聘の延享5年（1748）になる。当時の藩主は第6代継高である。藩主在位は享保4年（1719）から明和6年（1769）。当時の身分社会を考えれば、武士、領民の合同位牌を制作したことは稀有に値する。

⑤ 寺の資料

往古国主黒田公より61名の追善のため寄付賜ったとの記述から、黒田公の配慮が伺える。

この寄付からその一部の3百目を4人に貸付けたとある。この黒田公は当時の享保の事故に遭遇した継高公と思われる。

⑥ 扁額

横田久平、継高公に仕官した延享元年（1744）以降に書を書いたと推察できる。神宮寺の住職によれば、寺の口伝「御用船、御難のおり扁額を黒田公より賜った」という。

4. おわりにかえて

以上述べてきたことから、官・民で供養塔を建立したのは、次の通信使が来る延享5年3月であったと、また当時の藩主は継高公と比定する。

毎年8月16日に海岸傍の広場に合同位牌を持ち出し、流れ灌頂（施餓鬼供養）として、永年供養してきた理由が、今回の拓本採りで明白になった。その後神宮寺の縁起『窟観音濫觴記』に、また島の祭り『八大龍王祭』の記述に、また相島庄屋の古文書などで通信使に深く関わっていたことが確認できた。当時の島人が通信使に如何に馴染んでいたかを証するものである。

このような史実がありながら、後年相島において朝鮮通信使が殆ど語り継がれなかったのはなぜだろうか。今回の調査で供養塔、井戸、波止が町の指定文化財に認められたことは通信使への関心が深まると信じたい。

新宮町教育委員会調査報告書『朝鮮通信使客館跡』に石碑周辺に享保4年7月24日の61人溺死者の墓と思われる25基あり、未調査とあるが今後の課題である。

来年6月、ユネスコ世界記憶遺産登録で弾みをつけ、2019年に61名溺死の没後300年法要を日韓合同で行えればと相島歴史の会として思っている。

相島歴史の会 5周年のあゆみ

当初の経緯：石碑の拓本採りが総てのはじまり・・・詳細は別紙参照（カラー刷り）

- ① 2010年5月 「相島歴史研究会」立ち上げ→のち「相島歴史の会」に改称
- ② 2010年6月10日 百合越浜の石碑に注目
- ③ 2010年10月16日に拓本採り・・・第9次通信使迎護準備中の61名溺死の
供養塔と判明（各古文書9つと合致）
- ④ 2010年10月29日 新聞社4社（西日本・朝日・毎日・読売）に発表
- ⑤ 2010年11月2日 相島での縁地連朝鮮通信使研究部会で発表
- ⑥ 2011年 1月19日 台座の拓本採り「享保4年7月24日」との文字判明
- ⑦ 2011年1月29日 ふれあい館で発表会 約30名（通信使ファン各地から参加）
*この発表で神宮寺に関連遺物（合同位牌・扁額・寺資料に記載）があることが判明
した→石碑の建立時期などの考察は朝鮮通信使研究部会編「研究紀要」に掲載
（2015年10月刊行）

過去の主要行事・トピックス

- ① 2011年4月 日韓朝鮮通信使シンポジウム2日目 相島フィールドワーク51名
- ② 2012年3月 相島歴史年表作成 県立図書館・福岡市・新宮町図書館に寄贈
- ③ 2013年2月 朝鮮通信使縁地連に加入、神宮寺に随時朝鮮通信使関連史料展示
- ④ 2013年3月 朝鮮通信使関連の波止・井戸・石碑の3点が文化財に認定される。
- ⑤ 2013年3月 散策マップ作成
- ⑥ 2013年7月 韓国歴史地理学会 相島訪問 34名
- ⑦ 2014年7月 西谷先生 講演会と現地説明「積石塚群」参加者156名
- ⑧ 2014年8月 日・韓大学生（APU 大学主）相島平和フィールドワーク111名
「石の唄ひびけ」DVD 上映
- ⑨ 2014年10月 神宮寺に嶋村文庫開設、朝鮮通信使関連本約500冊
- ⑩ 2015年 4月 相島歴史フェスタに歴史部門で参加、KBC・TV 取材（2回）
*韓国釜山文化財団の李理事長、ユネスコ世界記憶遺産登録の韓国側の技術委員長
姜南周氏 来島頂き意見交換会（テーマは島興し）。
- ⑪ 2015年6月7日 民団福岡主催 相島訪問 朝鮮通信使史跡巡り 約140名
*朝鮮通信使をユネスコ世界記憶遺産登録推進運動のため。
- ⑫ 2015年9月 西谷先生・嶋村先生 ダブル講演「朝鮮通信使と日韓交流の島」
参加者 187名 臨時船運航 10：10、15：00
- ⑬ 2016年4月 相島歴史フェスタに歴史部門で参加、（熊本地震で影響あり）
- ⑭ 2016年5月 APU大学轟ゼミ 一泊二日合宿「世界記憶遺産を活用した地域
づくり」島の関係者 23名インタビュー 7/23 報告会予定

*補足

・NPO法人朝鮮通信使縁地連絡協議会・・・ユネスコ世界記憶遺産登録の申請団体
略称 縁地連

2016. 6. 25現在

神宮寺所蔵物の紹介



神宮寺



掛軸「釈迦涅槃図」



神宮寺扁額「海寶山」

神宮寺
正式には海寶山御念院神宮寺と称する、開山は一蓮社法譽上人祖傳大和尚。この上人は元和元年（1615）に86歳で相島で亡くなっている。寺は当初、若宮神社に隣接して建てられていた。しかし、明治元年（1868）廃仏毀釈の嵐が起り寺の名称も心空寺と改称した。大正2年（1913）県知事の許可をえて寺号を心空寺から再び神宮寺に改称した。神宮寺の資料には神宮寺創建以前に一寺院があったと記録されている。場所は島の北東の海渚とあり、地理的条件から推察すると、現在の小字日の丸の岩宮神社のあたりかと思われる。



署名：狩野法眼門弟上田主治

釈迦涅槃図
絵師は狩野法眼の門弟上田主治、製作年代は不詳。天明6年（1786）に表装、この時既に50年経過とある。推定享保20年（1735）か。天保4年（1833）に再々表装。最後は明治37年（1904）に表装された。この涅槃図と類似のものが志賀島莊嚴寺にあり、箱書に元文2年（1737）と記載。



志賀島莊嚴寺の釈迦涅槃図



掛軸「地獄変相図」

地獄変相図
絵師は蘭榮、製作年代は不詳。天明6年（1786）に大破のため表装、その後50年余経過し、天保4年（1833）に再々表装。最後は明治37年（1904）に表装された。釈迦涅槃図と共に施主の中には日蒙供養塔建設祈願の児島正達の名前も見える。



寶物大銚子

大銚子
豊臣秀吉から頂いたとされる神宮寺に昔から伝わる寶物大銚子。国内を統一した秀吉は文禄元年（1592）と慶長2年（1597）に朝鮮へ出兵した。諸国の軍勢が海路名護屋城に向かう途中、相島に立ち寄り航海安全と戦勝祈願をしている。秀吉が上陸したかどうかは定かではないが平成3年発行の「新宮町古今」では秀吉の軍団17万がシケのため相島に寄港した時、乗っていた船「日本丸」の旗「日の丸」を揚げさせ、潮井石を積んで航海の無事と戦勝祈願をしたことからこの場所を日の丸と呼ばれるようになったと伝えられている。



太閤潮井の石



百合越浜の石碑



島東海岸に祀られた地蔵仏
元寇の時の碑とも伝えられる

平成3年発行の「新宮町古今」に掲載されていた石碑とお地蔵さま。「元寇の時の碑とも伝えられる」と記載されている。



黒田公より賜った扁額



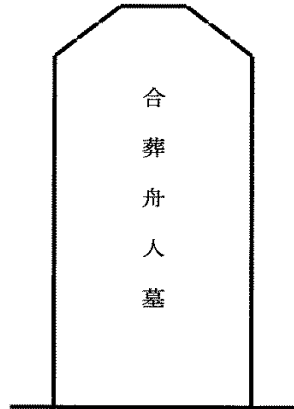
61名の合同位牌

合同位牌

毎年8月16日に行われる流れ灌頂(施餓鬼供養)で他の事故ともども供養され続けて現在に至っている。

発見された石碑

このお地蔵様と石碑については従来から謎であった。何故か昔から相島の方は毎月24日にお参りしていた。平成22年(2010)10月16日、「相島歴史の会」による石碑・碑文に関して拓本取りの結果、享保4年(1719)第9次朝鮮通信使の受入れ準備中の7月24日、台風による作業中の福岡藩士及各浦々から徴用された水夫等総員61人溺死の鎮魂・慰霊碑と判明した。右の石碑文を現代文にて表わすと、およそ次の通りに解されよう。赤文字は文字が存在するものと仮定して挿入した。



表面

扁額「心行三昧」

神宮寺の口承で「御用船御難のおり扁額を賜った」とある。また、神宮寺の資料には黒田公から供養料を賜ったと記載がある。

石碑の建立時期は？

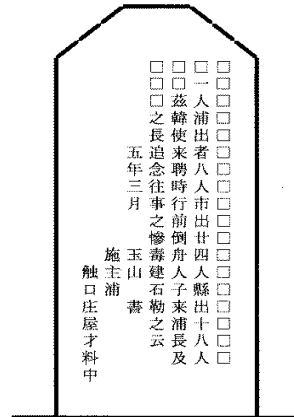
この碑の建立者は当時の浦人であるが、建立時期はただ5年としか分からず正確な年は不明である。当時の背景や碑文を書いた玉山の交流の人物などから考え、次の第10次通信使を迎えた延享5年(1748)3月と比定した。

神宮寺の資料

「當山施餓鬼供養料借主覺」とあり、4人の者が借金していることが記載されている。中央に赤文字で「當山貸付ノ施餓鬼料六錢三百目ハ往古国主黒田公ヨリ六十一靈追善ノ為メニ寄附セラレシ祠堂財ト口碑ニ傳ヘシモ近來数十年間……」と特段の記述がある。

『韓使(朝鮮通信使)一行が藍島滞留を目前に、受入れ準備作業中の爲に徴用された福岡藩士十一人、浦(港々)から出た者八人、市(博多・福岡)から出た者二十四人、縣(郡)から出た者十八人が台風により茲に韓使がご到着される前に倒れた(遭難による溺死)。逝去された舟人の子も来て浦長・市長・縣長らと共に往時の悲惨で気の毒な事故を悼み、追念供養をして石碑を建て、それに勒(刻字)してこのことを永く伝える。

五年三月 玉山 書
施主浦(供養者 浦関係者)
触口・庄屋・才料・中
(大庄屋・庄屋・宰領=発起人・一同)



背面



石碑文字の拡大写真

明治九年

當山住職廿六世 的場 間胤
檀 中 総 代 友 納 鐵 八

石碑文字の「韓使来聘」(通信使)に注目!

「石碑」は「2つの波止」及び「2つの井戸」と共に平成25年3月新宮町の文化財に指定されている。

(2016. 6. 25 改定 B)

第50回 福岡県地方史研究協議大会

福岡と朝鮮通信使

～地方史の窓から世界が見える～

「相島通信使関連史跡調査の近年の成果」

～享保4年7月24日大風破船・61名溺死事故を中心に～

(相島歴史の会活動報告)



相島歴史の会 神宮寺学芸員
今村 公亮

1. はじめに・・・相島とは！

2. 相島調査 近年の成果

享保4年（1719）大風にて
61名溺死、その供養塔、蘇える。
(はじめりは拓本採り)

3. 会の活動報告・・・結成6年目！

古文書翻刻・ガイド・講演会
・歴史年表他

4. 今後の調査課題・目標

- ・通信使ユネスコ世界記憶遺産登録に！
- ・2018年7月24日、300年法要
(日韓合同) * 2年後
- ・相島に資料館を！



「岩国徴古館所蔵の藍島図」

(延享5年・1748)

1. はじめに

古代・・・積石塚群(古墳) 4C～6C 平安瓦 海底から出土！
 中世・・・蒙古来襲
 近世・・・江戸時代 朝鮮通信使来島 11回 (秀吉時代 2回)



新宮町の沖合 7.3Km 周囲6.1Km
 総面積 1.22平方Km の三日月形
 の小島、新宮港から渡船で17分
 現在の人口 286人程度

ピーク時の人口 1406人(昭和11年)
 「江戸時代 天和2年(1682) 385人」
 福岡藩の重大任務

- ① 長崎警備・・・寛永18年(1641)～
肥前藩と隔年毎担当
- ② 異国船監視・・・抜荷(密貿易)取締り
- ③ 朝鮮通信使応接・・・将軍の襲職祝い
(原則)

福岡藩、応接でのトピックス・災害(事故)など！

年 度	内 容	藩の当時の状況	備 考
天和2年(1682) 5月2日	先波止(通信使専用揚陸)・前波止の築造	<ul style="list-style-type: none"> ・倭約令2回発動 ・1667年 伊藤小左衛門密輸事件 ・1676年 末次平蔵抜荷事件 ・1677年 第2黒田騒動(綱之廃嫡) 	(綱吉・・・天和の治見) 対馬藩主が波止構築で揚陸がスムーズに運んだと幕府へ報告。財政困難な折に築造した苦勞、評価さる。
享保4年(1719) 7月24日	迎護準備中に大風、40余艘破船・61名溺死の大惨事	客館一部破損、波止一部崩壊。当時通信使一行沓岐滞在、大風吹き足留め。	福岡藩、対馬藩主に一時延期を申し出ながら懸命の復旧で対応、応接は無事に終える。
明和元年(1764) 12月3日	副使船岸壁に激突大破・荷物紛失	黒田藩の誘導ミスと朝鮮側主張し、一時険悪に陥るが誤解とける。	対馬側の説得で朝鮮側了承。代替船の手配他で長期滞在となる。

2. 相島調査 近年の成果

享保4年(1719) 迎護準備中に61名溺死の 供養塔 甦る !
 この石碑・お地蔵様は長い間、流れ仏の供養のためと云われていたが、
 2010年10月26日の拓本採りで朝鮮通信使迎護準備中の事故の供養塔
 (墓)と判明した。



百合越浜



韓使来聘の文字に注目



石碑供養塔の文字

表 令葬舟人墓」

裏

- 一人浦出者八人市出廿四人縣出十八人
- 茲韓使來聘時行前倒舟人子來浦長及
- 之長追念往事之慘毒建石勒之云

五年三月

玉山 書

施主浦

触口庄屋才 □ 中

(料)

台座の文字

享保四己亥年

七月二十四日

風波茲死人 □

□ □ 為 □ □

溺死事故への黒田藩の気遣い！



合同位牌
(61名)
神宮寺
中澤住職

* 拓本採りから合同位牌の意味が判明。昔より毎年8月16日、流れ灌頂で供養されてきた。



黒田公より賜った扁額「心行三昧」
(御用船御難の折に賜ったとの口伝あり)

黒田公より供養料賜わる！・・・寺の資料により判明

資料の右側の頁に「當山施餓鬼供養料借主覚」とあり、4人の者が神宮寺より借金していることが記載されている。

中央に朱記で「當山貸付ノ施餓鬼供養料六錢三百目ハ往古国主黒田公ヨリ六十一靈追善ノ為メニ寄付セラレシ祠堂財ト口碑ニ傳ヘシモ近来数十年間……」と特段の記述がある。

明治九年

當山住職廿六世 的場 間胤
檀 中 総 代 友納 鐵八

天和2年(1682)に築した **先波止**



朝鮮通信使専用揚陸・・・他に例なし！
長さ 47M、幅 5M、高さ 3.6M
手前に 前波止あり(対馬藩・黒田藩揚陸)

客館跡之碑 2010年築(個人)



島の南西の地、東西 117M、南北126
M(約4500坪)・・・黒田藩が一時借用

享保4年7月24日大風破船・溺死の記録について

1. 横大路家『大庄屋留書』・・・裏糟屋郡の大庄屋の記録 (碑文の原形か?)
享保四年大風 水夫等死スの見出し
「同廿四日朝五ツ時方 東風起り大風吹御木屋之内少々破損、其外相之嶋家転
家吹破御船拾四艘 詰舟之内八艘破損、御梶取其他御扶持人拾壹人・御郡
水夫拾八人・御町水夫貳拾四人・御浦水夫八人 六拾壹人死ス」
2. 「福岡藩朝鮮通信使記録(九)『享保四己亥朝鮮人来聘記 五』
3. 『黒田(続)家譜卷之十九』
4. 長野日記(長野源太夫)・・・埋葬場所 藍島と明記。
5. 吉田家伝録(吉田式部治年)
6. 安見鼎臣弼集録 黒田家譜早鑑・・・相島大風破船の見出し、梶取の名(5名)
7. 近世博多家伝録(磯野五兵衛)・・・溺死人数 60~70人 下人連れ見物、書
を揮毫して貰う。

8. 『扶桑録』金滄著…享保四年(1719)の朝鮮通信使の金滄(フブ)軍官
「初三日癸卯。西南風。留藍島。聞向於二十四日風雨。在此倭船十余艘。
為波浪沉没。七十餘人。亦為淹死。聞來驚慘。夜宿下處。」

70余人が溺死、これを8月3日に知り、驚き、心から悼み同情している。

- * 福岡藩が気遣い、知られないように処理したので、朝鮮側にはこの事故は、知られていないと最近まで思っていた。他の使行録(享保度)も併せ精査する必要がある。

金軍官の記録に見られるのに、申維翰の『海游録』になぜ無いのだろうか？ 慮りか？ 今後の課題！

申維翰は相島に9日間閉じ込められたおり、島をくまなく探索し、山に登り、また積石塚群(古墳)まで足を延ばしている。61名溺死の処理で大わらわの人々を観ていたとも思われるが、記述が無い。

相島でその後判明した通信使関連記録

- ① 『阿部島窟観音濫觴』…神宮寺所蔵 明和7年(1770)に書。
「朝鮮の三使錦帆を連ねて此の島に泊船し詩を謡い樂を奏す。
此の壮大なる有様を見聞きせんと数萬の人寄来る」
- ② 『八大龍王祭』…島に古くから伝わる祭り
安永9年(1781)に書写。
「朝鮮人ハ 十二月四日に入津、同年二十六日に出帆したり、
西野善左衛門八歳ノ時ナリ」 日程から宝暦十四年(1764)
の通信使来島になる。

③ 『備忘愚鈔』…横大路家(裏粕屋郡の大庄屋)

享保四年朝鮮人來朝副使書記

姓成名夢良安汝弼号嘯軒居士

立花口村觀音堂扁額者嘯軒書

寫莊村竜王宮之額同筆也觀音

額者元文立申年獨銛寺住僧

勉空揚之 三苦村虚空蔵之

額即嘯軒同筆也 於藍島而

願而三額漸成矣

意は享保四年(1719)に

来た**朝鮮通信使副使の書記の**

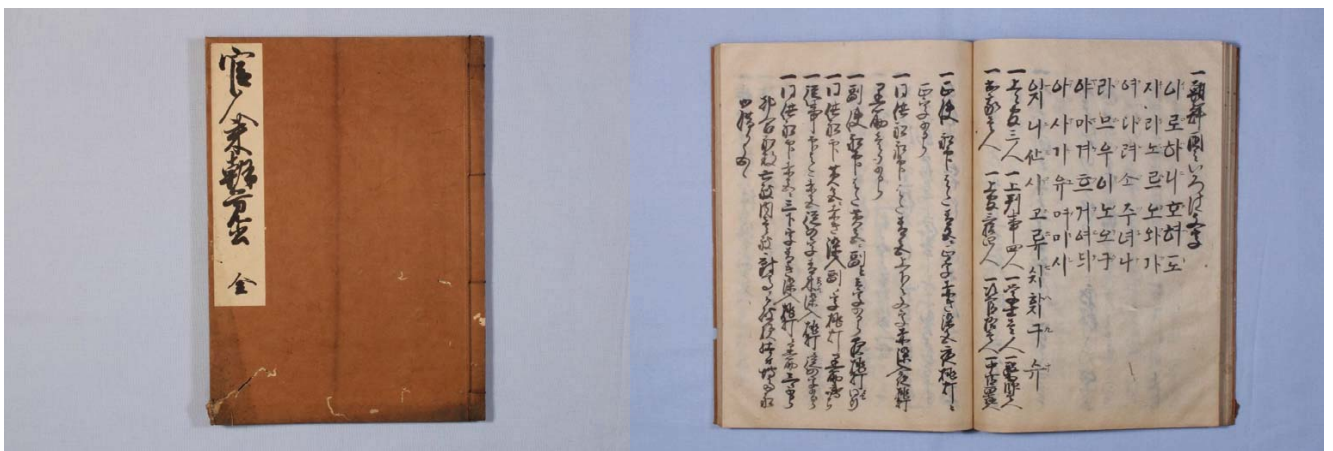
成が立花口村の觀音堂、焉莊村

の竜王宮、三苦村の虚空蔵堂

の三箇所宛てに**扁額**を書いた

とある。調査するも見付からず。

④ 相島の庄屋の文書 **見つかる!**…正徳元年(1711)長三郎著
『官人來朝覚書』



原本福岡市立博物館、訳本は『新修福岡市史・資料編近世Ⅰ 領主と藩政』に!

朝鮮国いろは文字 **ハングル**が記載!

3. 相島歴史の会 活動報告(ポイントのみ)

- ・2010年6月 … 石碑に注目
- ・ " 10月 … 石碑拓本採り(韓使来聘の文字、水夫の数他確認)
- ・ " 10月 … 新聞4社に調査結果発表(記者会見)
- ・2011年1月 … 石碑の傍の台座の拓本採り
(享保四己亥年七月二十四日 略 風波茲死人 略)
- ・2011年1月 … 報告会 神宮寺の関連遺物判明(合同位牌・扁額・寺資料)
- ・2011年4月 … 日韓朝鮮通信使シンポジウムにて発表(中間報告) 西南大学
翌日相島フィールドワーク
- ・2012年2月 … 『相島歴史年表』作成、 県・市・町 各図書館に寄贈
- ・2013年2月 … NPO法人朝鮮通信使縁地連絡協議会に加入、
神宮寺に通信使関連史料展示
- ・2013年3月 … 朝鮮通信使関連の波止、井戸、石碑(供養塔)の3点文化財に!
相島 散策マップ作成
- ・2014年7月 … 西谷先生 相島講演と現地説明「積石塚群」 156名

- ・2014年8月 … 日韓大学生(APUが主) 相島平和フィールドワーク 通信使
111名
- ・2014年10月 … 嶋村文庫開設 通信使関連本500冊寄贈!
- ・2015年4月 … 相島フェスタに歴史部門で初参加、 KBC-TV 取材
釜山から韓国文化財団李理事長、ユネスコ世界記憶遺産
登録の韓国側技術委員長の姜南周氏来島、意見交換他
- ・2015年6月 … 在日本大韓国民団 相島の通信使史跡巡り 140名
- ・2015年9月 … 第2回 西谷先生・嶋村先生 相島
ダブル講演「朝鮮通信使と日韓交流の島」 187名
- ・2016年3月 … 日韓合同でユネスコ世界記憶遺産登録申請完了
- ・2016年4月 … 相島フェスタに歴史部門で参加 (2回目)
- ・2016年5月 … APU(立命館アジア太平洋大学)轟ゼミ 一泊二日「世界記憶
遺産を活用した地域づくり」 島の関係者23名にインタビュー、
7/23 報告会
歴史年表大幅改定(4刷り) 関係先差替え

4-1 今後の調査課題・・・行政と共に！

- ① 文献 ・朝鮮通信使に関する福岡藩・各庄屋記録の悉皆調査
特に61名、溺死者の名や供養塔に関する記録他
・朝鮮側の享保度の記録調査（未調査2件）
・福岡藩・各庄屋の費用支出の記録について
・享保4年の災害に関し、種々費用支出の記録
* 古文書翻刻力の向上
- ② 発掘 ・61名の墓、現在判明分25名と未調査箇所の詳細調査
・客館跡地の未調査箇所の発掘・・・H7年は僅か80坪！
・有待亭跡地調査・・・秀吉時代の通信使との関連調査

4-2 今後の活動目標・・・行政と共に！

- ・百合越浜の供養塔に説明板(韓国語併記)・・・2016年5月設置
- ・通信使をユネスコ世界記憶遺産登録に！・・・2017年8月予定
- ・2018年7月24日 300年法要(日韓合同)の開催・・・2年後
- ・相島の朝鮮通信使・ガイド本作成、ガイド養成の支援！
- ・相島に資料館の建設！

大英博物館所蔵 通信使行列屏風





相島 朝鮮通信使行列
(2010年11月2日)

ご清聴ありがとうございました。

2016年 6月 25日

相島歴史の会 神宮寺学芸員
今村 公亮

補足 1 経塔様・流れ灌頂

- 郷の先、先波止の先に島の人が「**経塔様**」と呼んでいる**石碑**がある。相島の海岸には昔からよく死体が流れ着いたといわれ、**流れ仏**を祀った**供養碑**であるという。海を向いて立ち、表に「**海中横死人為追善**」と刻まれ、裏に「**若者中**」とあるが年号剥離して判読できない。その手前には陸を向いて明治七年に建てられた「**三界万霊塔**」がある。



補足 2

- 今回次のような仮説を立てた。享保4年大風による61人の溺死者は殆ど島外の人(浦出は8名)であり、博多・福岡の加子が24人、郡から18人、藩士11人とすれば、**百合越浜まで供養に行くには、当時は道もなく難儀である。**
- **参拝し易いように波止の近くに建立した可能性が高い。**同じようなケースが山の観音堂の事例に見られる。
8月に入ると神宮寺の本堂に施餓鬼棚を設置し、過去の海難事故死者の位牌を祀る。8月16日の夜、前述した「経塔様」の前で海難事故を弔う行事が「**流れ灌頂**」で**現在も営々と続いている。**今回、61名溺死の石碑の史実を蘇えさせたことで分かった神宮寺の合同位牌も、昔から持ち出され祀られていた。
- 神宮寺住職の話では「**黒田藩御用船遭難**」とのいい伝えがあることから、**結果として享保四年の溺死も含め海難事故を悼み、今日まで毎年供養されてきたことが分かった。**

第50回 福岡県地方史研究協議大会
福岡と朝鮮通信使 一地方史の窓から世界が見える一

平成28年11月15日発行
福岡県立図書館郷土資料課／編
福岡県立図書館／発行

